

女性の生業

一葉 橋口奈津の期待の地平

高橋新太郎

安政四（一八五七）年四月六日、甲斐国山梨郡中秋原村の農民樋口八左衛門の長男大吉（二七歳）と同じく古屋安兵衛の長女あやめ（三歳）の二人は、故里を出奔し、御坂峠・山中湖畔・須走・足柄の関・小田原・鎌倉を経て江戸に向った。父八左衛門より三歳年長で、同じ中農出身ながら志を立て、出奔十六年目で御家人の家禄を購つて幕臣となつた真下専之丞を頼つての出奔であつた。

この時あやめは身籠つており、この出奔の日と安政四年五月十四日という、奈津の姉・長女ふじの誕生日が正しければ、九ヶ月の身重であつたことを思うと、娘の結婚に対するあやめの実家の並ならぬ根強い反対を窺わせる一方で、娘あやめの決意の程、その勁直な意志をも読みとるべきだろう。

この出奔は、あやめ懷妊を機に、専之丞に倣つて士分への宿願を果そうとする大吉の切羽詰つた決断であり、それ

の対価として、念願の武士の身分と操守すべきその自尊心を入手することができた。十月十四日には徳川慶喜が太政復古を列藩に布告し、旧体制が瓦解する直前での大願成就であり、下級士分への参入であつた。

明治五年三月二十五日、次女奈津が誕生する。父はその頃、東京府権小属の職に在つて、この年則義と改名、社寺取調係などをつとめる。明治九年十二月には退官し、百六十円の下賜金を得、これらを基金として利殖の道を講ずるようになる。翌年十月には警視局備となり、十四年三月には警視属に進み、二十年六月まで勤めた。

八丁堀同心というかつての職掌柄もあるが、維新後の警察制度に組み込まれることはかつての武士としての自尊心を損なはず、生計維持の可能性をもつ「俸給生活」を保証する職業として、一般武士層にはすぐれて馴染み易いものであつたろう。

故郷出奔時からひたすら燃やし続けた強い上昇志向に支えられて、やつと維新動乱期に手に入れた俄か士分ではあつたが、逆にその故にこそなお更に、武士としての名譽意識をつよく持たざる得なかつたであろう。それは樋口則義の妻女にとつても同じい。一月足らずのわが乳児を手放し、旗本一千五百石の息女鉱の乳母として立派に勤め上げ念願の身分上昇を果した、あやめ、のちの多喜にとつても自分の妻女としての衿りが、生きがいともなつた。

ほまた、南喬と号して詩文に親しみ、真下専之丞と親交のある、水利権に関わる事件で老中にも直説したこともある八左衛門の暗黙の理解というよりは、最終的には、積極的な根回し支援無しには達せられなかつたことであつたろう。

大吉（のち則義）は、藩所調所勤番衆筆頭の真下を頼つてその使い番となり、あやめ（のちの多喜）は、出産後一ヶ月足らずで、ふじを里子として預け、自身は二千五百石の旗本稲葉大膳の養女鉱の乳母として数年仕える。大吉はその後、大番組守力田辺太郎に抱えられ、御勘定組頭、菊池大助の中小姓から公用人と成つて仕える。元治元年には長男泉太郎、慶応二年に次男虎之助が生まれ、慶応三年七月十二日付で、南町奉行配下五番組仁杉八右衛門支配下の同心浅井竹蔵の株を譲り受け、取米三拾俵武人扶持の小身ながら晴れて士分の身となつた。

出奔から苦節十年、大吉、あやめ夫婦の刻苦辛苦の歲月

一葉の残した「筆書き」には、「母君はいたく名をこのみ給ふ質におはしませば児賤業をいとなめば我死すともよし、我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ」とある。

武士層によつて承認されて来た名譽・体面を重んずる意識は、明治になつても強固に残存しており、それは、個人の意識内にとどまらず、四民平等を謳つた維新後の為政者の公けの意識の中でも息づいており、ヘ士族ハ廉知ヲ知り正業ニ從事可致ノ處、貸座敷、藝娼妓等ノ醜業渡世為致儀。仮命如何様ノ情実有之候共難聞届儀ト存候」という太政官布告にも明らかであり、これは奈津の母多喜の人目見苦しからぬ業を切願し、児賤業を當めば、我死すともという士分の妻女としての気概にも通じてゐる。

いわゆる「維新革命」後に、武士階層は、經濟的特權であつた家禄を失い、社会的特權を剥奪され、「士族」という戸籍上の族籍として形骸化されたかに見えたが、その「名譽」意識は、根強く残存し、価格価値は減じたものの「士族」株の売買は、明治十年代にも及んでゐる。

武士から單なる族籍上の士族へ、実質的に士族に残されたものは、わずかに旧家禄高によつて支給された、退職金代りの金禄公債の利子の受領のみであつたが、それとでも下士層では、生活の困窮から足元を見すかされ、商人に公債が買いたたかれる状況をも生んでいた。

その意味では、奈津の父樋口則義の維新後の生活は、一応無難な出発を果したのであつたが、奈津より八歳年長の長男鬼太郎が戸主を嗣ぎ大慈省雇いとなつたものの二三歳で夭折したことであつて、明治三十一年二月に則義は長女

奈津に家督を相続させ、自身は、荷馬車運送の事業を企てるが、中途で頓挫し、翌年七月に病死する。

女戸主として、樋口奈津の老母多喜、妹久仁を交えた三人の暮らしの苦難が始まる。母多喜が乳母として仕え、主家と仰ぐ旗本の自身稲葉家にあつては、没落の坂道は急で、娘鉱の婿として迎えられた稲葉寛は、種々の小事業の試みに失敗した後、日雇いの人夫や車夫に身をやつし、明治二十一年十二月に一葉は同じ乳にすがりし身の縁から、零落の稲葉家を訪れ、鉱に『都の花』掲載の『曉月夜』の原稿料十一円四十銭の中から十円を収穫として送り、へ書はし三千石の姫と呼ばれて白き肌に綾羅を断たざりし人の……形見と残るものは卯の毛におく露ほどもなし夜具蒲團もなかるべし手道具もなかるべし。あるじは是れより仕事に出る処とて筒袖の法被寒けにあんかを抱きて夜食の膳に向ひ居るもはかなし』(『よもぎふ日記』)と記している。稲葉寛は、二十六年に市ヶ谷監獄の看守として職を得るが翌年病死する。

明治二十七年秋、久野おばさんは年季が明け、吉原

年刊の『遊女評判記』を参照して描いているのだが、その

中にも、幕臣の二女として生まれ、豪放な性格が樓中を庄としたとされる定河内楼の『金山』や静岡藩士の一女として生まれた宝來楼の『阿古女』などが紹介されている。

士族の没落子の窮迫は、明治二十年代文学の主要な題材の一つであり、「遊女」は武士的儒教觀からすれば、「醜業」の側面をも見うるが、へあくくれの噂にも御出世といふは女に限りて)「たげくらべ」とあるように、種々の意味で、女性にひらかれた数少ない「生業」の一つであり、生の重みを荷つた「正業」の一つでもあつたろう。

遺された一葉の日記を読むと、見方によつては、それは、金の遣り繰り、借金の繰り廻しの記録である。様々な手蔓をたよりに母と合力して金の工面に追われ続ける。それは晩年をいうのもおかしいが、死ぬまで続いたとも言える。

樋口奈津は、中島歌子の歌塾萩の舎の先輩田辺花圃が小説

『萩の糞』を書き、坪内逍遙の推薦で金港堂から出版し稿料として三十三円二十銭という、樋口家から見れば、三ヶ月分の生活費にも余る金子を得たことに刺戟をうけて、自分も小説を書いて収入の途をひらこうとした。

そこで小説修業が始まり、半井桃水との縁も生まれる。桃水は、日記に慕情を綴る小説の師でもあつたが、一方では、奈津一葉の金策の相手でもあつた。それは萩の舎の平民組の伊東夏子とて同じで、奈津にとつて、夏子は、物心

を去つた。そして翌年、見合いし結婚した。それから十年後、子供にめぐまれなかつた久野おばさん夫婦は、私の母を養女として迎えたのである。明治三十七年であつた。

画家斎藤藤真一の『明治吉原細見記』(一九八五年、河出書房新社)は、明治二十年ごろから明治二十七年ごろまで吉原で花魁だった養母内田久野への鎮魂の画文集である。

斎藤真一はへ久野おばさんが、ほとんど同時期に吉原にいたという事実から、私は特別一葉を身近な人と感じるようになつた」と記し、「後記」ではこの著をへ故和田芳恵先生に捧げる」とも書いている。源氏名に「紫」のつく遊女を索めて明治二十年から二十八年までの「吉原細見」を探索する等、二十年近くの調査を経た吉原細見の作品である。

七歳の時養女に貰われこの著刊行時にも健在の斎藤の母から伝え聞く養母久野は明治三年、岡山、池田藩士族の二女として生をうけ、父は廃藩によつてわずかな扶持を元手に呉服店を開くも使用人に欺かれて数年にして失敗、自害し果てる。久野の母は途方にくれ、帰郷、幼い二人の娘を連れ子として同じく士族出と再婚するが、これも武士の商法故か、人に請け判したことで財を失う。年頃となつて久野は家族の危機を救うため吉原に身売りする。

斎藤は、四十名の「遊女たち」の幻想画を、明治二十六

画面にわたる理解者であった。

金策の相手は、面識のあるものにとどまらない。「鑑藝術」を称し、「人身の吉凶諸相場の高低」を占う、本郷に住む久佐賀義孝への接近、大金「千円」の借用申し入れ、嘔に姿としての関係を迫る久佐賀、しなやかに、したたかに対応する一葉奈津。久佐賀への多額な借用の申し入れは、あるいは家塾經營を目論見てのことであつたか。借金の申し入れは、任侠の町奴を登場させる撥髪小説の村上浪六にも及び、用立ての約を果たさぬ浪六を難じてもいる。

当時浪六は春陽堂に三百円の負債をもち、『東京朝日新聞』連載の小説六回分をその償いに当てる約束だつたが、それを他の書肆に売つてしまつたため、訴訟沙汰になり係争中であつた。かけ出しの作家一葉にとつては、新聞に時めく流行作家浪六が負債を抱えることなど思ひ及ばぬことでもあつた。

下谷龍泉寺町への転居(明治26年7月20日)、荒物雜貨、小兒むけの駄菓子をあつかう小商いをはじめたのは、桃木が、朝日新聞の小説記者のかたわら、神田に葉茶屋を持つことからの刺戟もあるうが、なによりも日銭の入る商いによって一日一日の暮らしをとりあえず繰り回し安定させたいという考えによるものだらう。その上で非「糊口的」文学に筆を染めるというのが一葉ののぞんだものだらう。

いわゆる大音寺前での小商いの生活を経て、その後一葉の

かつたろう。

文学的世紀は成熟度を加える。それは女の「生業」への思いの深まりであり、巣本善治が婚姻論的見地から、「吾等の姉妹は娼妓なり」（『女学雑誌』明治18年1月）と論じたが、これとは立場を異にするものの、明治二十七年五月に始まる本郷丸山福山町の銘酒屋に隣接する新開地での生活をも含めて、一葉が感得したのは娼妓・酌婦をわが同胞とする思いであった。事実、母と妹久仁をも含めた一葉一家が、内職とした賃仕事の注文の元は、娼妓であり酌婦であった。

一葉が声主となつた明治の時代の、女が生業をもつことの困難さ、「大つごもり」のお峯の下女奉公、「たけくらべ」の大巻、「にぎりえ」お力の酌婦、「わかれ道」お京の針仕事洗張りの賃仕事、そして妾奉公への道。一葉の作品の半は女が生業をもつことの困難苦難を綴り続けたかとも読める。

家長としての樋口奈津一葉が、最初の心積りは、中島歌子の萩の舎の「ごとく歌塾で生計を建てる」とであつたろう。この思いは、かなり長く、奈津一葉の心の内にたゆたい、持続し続けていた。妹の友人で桃木との縁に微妙にかかわり、奈津とも長く交流のあつた野々宮菊子のように女学校教員への道も考えられぬではないが、中島歌子の推挙も不調に終わったように萩の舎の助教を務めたとはい、青海学校小学高等科第四級卒業という履歴だけでは道は拓けな

一葉は、生業としての「小説家」への道を歩むが、それでも、師事した『朝日新聞』小説記者の半井桃水の暮らしぶり、世に時めく村上浪六の実像を垣間見るにつけても、女として「小説家」を生業とすること、非「糊口的文學者」として生きることの難しさを、心の底に覚えさせるを得なかつたのではあるまいか。それは、「たけくらべ」以下の作品に与えられた周囲の賛賛の渦中にあつても、消しがたい一葉の想念であつた。「十三夜」のお闇は、かつて録之助の煙草屋の店先に坐することを夢とした時があつたが、一葉一家にとって煙草屋は、あらまほしい生業の一つのかたちだつたかもしれない。

齋藤緑雨・横山源之助・金子嘉一といつた一葉後年の人脈、そして鍋島邸に行幸・行啓のたびに参邸する中島歌子の、萩の舎の華族・貴紳に連なる歌門の人脈を思う時、華族貴紳の上層階級と、娼妓・酌婦をわが同胞とする細民の、双つながらの対極点に目を凝らす、希有な「探訪記者」も女性一葉のあり得べき生業の一つだつたやも知れぬ。

（たかはしんたろう・學習院女子短大教授・専攻近代文学）